
夜王子よ、いざゆかん

かき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜王子よ、いざゆかん

【Nコード】

N3806F

【作者名】

かき

【あらすじ】

晴れて高校生となった私は桃色高校生活を思い描いていたが現実には正反対。通学路にはコンビ二すらないし、心優しい友達を100人作るはずができる友達は悪友ばかり。密かに思いを寄せている安藤さんとはお話すらできないし、バンド活動は軌道に乗れず、時間だけが不毛に過ぎていく。そんな悶々とした日々思い悩んでいたある日、ついに私は悪友拓馬、宮元によって闇の世界へ引きずり込まれるのであった。

1、期待を胸に

このへんてこりんな世界で15年間生きた私は、最近ふと思うことがある。「いや、変なのは自分かもしれない。」と。しかしその度に「そんな馬鹿なことがあるか。」と、少し艶めいた青い空を見て笑うのだった。

最寄の駅から高校へ向かう道には、最近流行のコンビニエンスストアだとかマクドナルドだとかスターバックスだとかそういったハイカラなものは一切なく、代わりに潰れた映画館や小川の流れる公園や怪しい喫茶店などがあつた。

それまで帰宅途中にコンビニでパンを買ったり、喫茶店でコーヒーを優雅に啜ったり、マックでベーコンレタスバーガーを食べたりというのが高校生だと思っており、それが楽しみでもあつた私は新学期早々途方に暮れていた。

なぜパンが買えないのだ。なぜコーヒーが啜れないのだ。なぜベーコンレタスバーガーが食べれないのだ。

全てはこの胡散臭い高校に入学してしまったことに起因する。残念だが、過去には戻れない。

これから三年間、このローカルな通学路をほぼ毎日歩かなければな

らない。ああ少年よ、これも運命である。

その日はなにやら悲しげでやはり少し艶めいた空を見上げ、私は覚悟を決めた。

2、謎の人魚伝説

まずは私のことについて少しだけ触れておこうと思う。

私は山間の小さな村で生まれ、野山に囲まれすくすくと育った。中学2年生の時100年に一度の恋に落ち、儂く散った。それからというもののY染色体に囲まれ、卑猥な会議を日課とし、女性とは無縁の日々を送った。

だからこそ高校生活は桃色で有意義なものにしたい。ああ、我に神のご加護を。

私の通う高校は家から電車で20分ほどの、なんでもない二階建ての一軒家が並ぶ住宅街の中にあった。

もともとは女子高だったためか外壁はピンク色であった。その色がなんともいえない怪しげなオーラを放っていた。

その日私が無事高校にたどり着いたときには、もうHRが始まっていた。

教室のドアにはめ込んである透明なガラスから中を覗くと遠藤拓馬が私に気づいてにやにやと笑った。拓馬とは小、中、高と同じクラ

又という間柄で、俗に言う幼馴染というやつだ。拓馬は先生や親の前ではええかつこするくせして裏ではやりたい放題の悪ガキ野郎だった。

私はHRが終わるのを待つて教室に忍び込もうとしたが、拓馬がそれを許してはくれなかった。いや、許すはずがない。この男は人の不幸が大好物であった。教室の中で善人を装った拓馬の声が聞こえた。

「高橋先生、廊下に誰かいますよ。」

その声を聞いた担任の高橋先生が私に気づいた。拓馬め、後で覚えておれ。

「あら、また遅刻？いい加減にきなさい。早く教室に入って。」

私は無言で幼馴染を睨みつけながら席に着いた。どこからかくすすと笑い声が聞こえた。拓馬はお稲荷様みたいな顔で相変わらずにやにやと笑っていた。

ここで担任の高橋先生について書こう。入学した頃は担任が女でよかったと思っていたが、この先生は性質が悪かった。「人生やり直したほうがいいんじゃないの？」が口癖で年は40近い。化粧は濃く、できの悪い生徒にはとことん冷たくあたり、できのよい生徒にはやさしくした。そんな先生を私は好きにはなれなかった。

HRが終わると拓馬が私の席に来た。私は怒りに震えながら拓馬を睨みつけた。

「まあまあ、そんなに怒るなよ。安藤さんも笑っていたぞ。」

拓馬の口から安藤さんの名前が出てきて私は驚いた。

「安藤さんがどうかしたのか？」

私は平静を装った。

「好きなんだろう。」

ほほが熱くなるのがわかった。この男恐るべし。

「まさか、私は恋などしない。勉強やバンド活動で忙しいんだ。」

その時私はバンドでギターを弾いていた。中学3年の頃からやっているバンドだ。バンドを始めたきっかけは単に他の人とは違うことをやりたかったからだ。だから将来ミュージシャンになりたいなんてこっぴどくかしい事はこれぼっちも思っていなかった。

「僕はね、君のことなら何でもわかるの。ほっぺが真っ赤だよん。」

拓馬はそう言い残し女子の集団へと消えていった。

ここで安藤さんについて書くことにする。入学当初から私は暇さえあれば彼女を観察した。彼女は授業中ずっと窓の外を眺めノートは

とつていなかった。その代わりに何かをぶつぶつと呟いてはくすくすとして一人で笑っていた。外から入ってくる春風が彼女の短い黒髪を揺らすと、彼女は心地よさそうに目を細めた。そんな彼女に私は密かに思いを寄せていた。

その日の放課後、私は軽音部の集会に顔を出した。先輩方はみんな髪をつんつんに立て、なにやらじゃらじゃらとした金属を腰につけて黒いパンツをはいていた。

おっかないなと思いつながら周りを見渡すと、明らかになじんでいない一年生と思われるにきびだらけの少年がいた。私はその少年に声をかけた。

「一年生ですか？」

その少年はうなずいた。

「名前はなんて言っんですか？」

「のり、宮元のりです。よろしく。」

にきびの少年はそう言って苦笑いを浮かべた。

この男との出会いが私の桃色生活への野望を打ち砕くことになる。

ミンミンゼミが鳴きやまぬ8月のある日、私は川原に座ってボーッ

と遠くを眺めていた。それにしても暑い。こんな山の中でもこんなに暑いことから、もっと南の標高が低いところでは私は暮らせないと思った。干からびてしまう。

「いやあ、暑いね、今日も。」

どっかのおっさんのような口調で後ろから話しかけられた。

「拓馬、お前今日補修だろ?」

「いやいやそちらこそ。それより飲みますっ?」

拓馬がラムネを差し出してきた。

「お前にしては気が利くねえ。」

私はラムネをごくごくと音を立てて飲んだ。二人して夏休みの補修をサボり、川原でラムネを飲んでいるこの状況が私にはなんだか誇らしく思えた。

「そつえばさあ、安藤さんとは話せたの?」

私は安藤さんという言葉にドキツとした。

「うるさい。好きではないと言ってるだろうが。」

「またまたあ、照れなくて良いのよ。」

拓馬はスナックのママのような口調で言った後、にやにやと笑った。

安藤さんとはこの4ヶ月一度も話が出来なままだった。それに安藤さんはあまり学校に来なくなっていた。彼女は学校があまり好きではないような気がしていたが辞められては困る。私の唯一の楽しみが無くなってしまうではないか。

「なんなら僕が手伝ってあげましょうかあ？」

拓馬がしつこく探りを入れてきたが無視して一人思案に耽った。今頃何をしているのだろうか。ああ、安藤さんよ、健やかであれ。

そのときジャボーンと何かが川に落ちる音がした。拓馬であった。

「ここは川なんだからイルカなんか居ないよ。」

ずぶ濡れになった哀れな幼馴染に言った。

「じゃあ僕が見たのはなんだったんでしょうか。でっかい魚のようでした。」

「どうせ流木かなんかだろう。」

「確かにくねくねと泳いで居ただけどなあ。」

拓馬は首をかしげた。

私は宮元から聞いたこの川に纏わる人魚伝説を思い出した。宮元はここが地元だからこの辺のことには詳しくかった。

人魚は人魚でも顔はおじさんでボロツボロの服を着ているのだそうだ。普段はホームレスに扮しているが、時々この川を泳ぐ姿が目撃

されるのだという。その人魚は預言者であるとも言っていた。

私は「そんな馬鹿なことがあるか。」と、雲ひとつない艶めいた真っ青な空を見上げて笑った。

3、夜王子よ、いざゆかん

夏休みが終わると、安藤さんは学校に来なくなった。高橋先生は具合が悪いのだと言っていたが私はなんとなく学校を辞めたのではないかと思っていた。

私もその頃から学校を休みがちになっていた。

その日、私が学校をサボって昼下がりの木に囲まれた小川の流れる公園のベンチで読書に耽っていると、後ろから聞き覚えのある声が聞こえた。

「やーやー、君は昼下がりのOLか。」

宮元である。

「君も学校をサボったのか？」

私が尋ねると宮元は得意げに話した。

「先生には大便がしたいから帰りますと言ってきた。」

過去に大便がしたいからといって家に帰った生徒は居たであろうか。その言葉を聞いた時の宮元の担任の心中を思うと心が痛む。

「相変わらず馬鹿ですなあ。」

私は笑いながら言った。

「そつだ、川原に行かないか。今日は人魚が見れるかもしれないぞ。」

宮元が川原の方向を指差しながら言った。

川原に着くと宮元は煙草に火を点けた。私も一本もらって吸ってみた。げほげほとむせたが煙草を吸ったという事実がなんだか嬉しかった。この年頃の子供は大人の真似事が好きである。

「なあ、お前なんかやりたい事あるか？」

突然宮元が私に尋ねた。

「やりたいこと？」

「たとえばバンドとか、恋とか、勉強とかさ。」

私は黙った。高校に入学して5ヶ月がたったが、これといって自分がやりたいことがわからなかったからだ。バンド活動は何をしたら良いかもわからずに練習だけしているという状況だし、安藤さんは学校に来なくなったし、勉強は嫌いでもないが好きでもない。いたい自分は何がしたいのであろうか。

「わからない。」

私は答えた。

「何かしたいよなあ。俺と拓馬とお前でさ。」

宮元が呟いた。宮元と拓馬は私を通じて仲良くなっていた。

「そつえばさあ、もう学校辞めたやつ居るらしいぜ。」

突然宮元の口から出た言葉に私は不安になった。

「え？」

私は安藤さんの気だるそうな顔を思い出した。

「今日クラスの女子が話してた。名前はたしか、安藤とかいったっけな。」

どぼーん！私は川へと飛び込んだ。水が鼻に入ってツーンとした。ああ、神よ。ついに私を見捨てたのですか。そこで私の意識は途絶えた。

目を覚ますと心配そうに私を見つめる宮元のにきび顔があった。

「よかった。生きておられたか。」

宮元の顔から力が抜けた。

「どうしたんだよ。急に川に飛び込むなんて。」

「いや、なんでもない。ちょっと魔が差しただけだ。それより助けてくれてありがとう。」

私は笑みを無理やり作って言った。

「おお、おかげで人工呼吸をする羽目になっちまったけどな。」

どぼーん！私はまた川へと身を投げた。

ファーストキスを宮元に奪われてから一週間がたった。私は遠藤さんが退学したことで、遠藤さんに捧げるはずだったファーストキスをあろうことかにきび野郎に奪われたダブルショックで今日まで寝込んでいたが、今日やっとの思いで布団から抜け出して学校へ行った。

下駄箱で上履きを引っ張り出したとき、一緒にノートの切れ端がさらりと落ちた。

そこにはこう書いてあった。

（今日深夜二時貴方の村の駅で待ってるわ。安藤）

私は腹を抱えて笑った。どうせまた拓馬のいたずらだろう。人をからかうのも大概にして欲しい。

教室に入ると拓馬にその紙切れを見せた。

「おい、こんなものにだまされるとでも思ったか。」

「あ、ついに学校に来た。風は治ったんですか？」

拓馬はけるける笑っていた。

「そんなことよりこの紙切れは何だ。」

私は拓馬を睨んだ。

「いや、しりませんねえ。どうしたの？」

「下駄箱に入っていた。お前だろう？」

私は拓馬を問い詰めた。

「いや、本当に知りません。だいたいそんなことをしても僕には何の利益もないだろう。」

拓馬はさらりと行った。

「本当か？怪しいな。」

私はにやりと笑った。つられて拓馬もにやりと笑った。

「二時か。」

親に寝ていると思わせるために電気を消した部屋で一人呟いた。

私は考えを巡らせた。本当に安藤さんは来るのであろうか。居たとして、私に何の用があるのだろうか。何でもいい。行ってみる価値はあるだろう。

時計は一時半を指している。親は寝たらしい。私は覚悟を決め両親に気づかれないように外に出て、自転車で雨の後の湿った道路を走り出した。

真夜中の駅は昼間とは違って真つ暗で何も見えない。街頭も消えている。本当にこんな場所に安藤さんは居るのだろうか。

辺りを見回すと、駅の待合室に人が座っているのがかすかに見えた。

私は期待を胸に待合室のドアを開けた。そこには安藤さんではなく、にやにやと不気味な笑いを浮かべる拓馬と宮元の姿があった。

「夜王子よ、いざゆかん」

二人の悪友の声が、真夜中の駅に響いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3806f/>

夜王子よ、いざゆかん

2010年12月23日14時19分発行